

白鳥十郎長久公の謎

細谷 優(白鳥)

白鳥氏が歴史に表われてくるのは、南北朝時代からで、「後太平記」や戸沢藩の「戸沢家譜」に白鳥冠者義久が見へ、同系譜には1402年(応永9)鎌倉公方と大崎・伊達氏の争乱には、最上・寒河江氏などとともに白鳥氏が鎌倉方として登場している。

この頃すでに白鳥郷ではかなり成長した豪族であったらしい。これ以前の事は、資料がないのでわからない。

前九年の役でやぶれ、安倍貞任の兄弟行任・則任が出羽国葉山に潜伏し、やがて山を下り、館をかまえたところが、ふるさとの白鳥の地形に似ておったので、白鳥と名づけたと伝えられている。

楨清哉先生は、白鳥氏の歴史を一つにまとめようと、十年くらい資料を集めて「白鳥十郎ものがたり」を書いたと云っているが、生前、資料がないので推測で書いてある部分があるので、果たしてこれでよいかと云う不安はたちきれないと云っていました。

白鳥氏の歴史全体が明らかにできない原因は、何と云っても、ほろぼされて白鳥家の流れが全く姿を消したからです。

系図についても「河北町の歴史上巻」で詳しく叙述しているが、どれが本当か不明確であり、次のように述べている。

大江氏にしても、中条氏にしても、幾多個別の系図が流布しているように、白鳥氏にしても、その類を同じくし、「武家評林」に載る白鳥(比与鳥)家系図があり、谷地には「慶長7年(1602)寅季夏林鐘、谷地十郎家臣茂木弾正照重」と奥書のある白鳥家系図が東町茂木家に残っている。その他にも安倍氏の系図を立てるもの、大江氏の一族とするもの、中条家の分派とするものがあり、真偽をつかみ難い。

白鳥氏の歴史を考える場合、何を手がかりにしたら良いのか、近隣武将の日記等、「伊達輝宗日記」や「性山公治家記録」を参照し、明らかにするしかないのかもしれない。

戸沢藩の私記「家林会集記」に康正元年(1455)に幕府が古河公方成氏討伐しようとして、奥州諸軍に出兵を要求したが、この時兵を發した諸将の中に、白鳥十郎義郷の名が見へる。

また一関田村家文書なるものが、現在一関市立図書館にあると云う。これは伊達植宗が一族の争の時、白鳥氏に、最上氏の援軍依頼の仲介を頼んだ「田村家文書」がある。

その手紙のあて名が「謹上白鳥殿」とある。当時の慣習からすれば、謹上とするのは、尊敬に相当するもので、この頃の白鳥氏は伊達氏からも重視されていたのだろう。

白鳥氏と最上氏との婚姻

色々な説があって、どれが本当かわからない。「河北町の歴史上巻」筆者、今田信一先生は次の八つの説があると云う。

- 1 義光の妻を長久の妹とするもの - 洪柿園著「最上川」
- 2 長久の妻を義光の娘とするもの - 天正最上軍記・茂木系図・谷地八幡略記
- 3 長久の妻を義光の姉とするもの - 中里氏抄録「国史」
- 4 長久の妻を義光の妹とするもの - 俗説
- 5 義康の妻を長久の妹とするもの - 俗説
- 6 義康の妻を長久の娘とするもの - 永慶軍記・義光物語・会津四家合考・出羽風土記・定林小史・谷地町志・最上家系図
- 7 義康の妻を長久の養女とするもの - 山形の歴史
- 8 義康の妻を白鳥光清の娘とするもの - 最上家譜

4・5以外は立派な記録が残っている。

槇清哉先生は、最も重要な史実にどうして、これほどの説があるのか不思議でならないと云っていた。

これについて、青柳重美氏は新説を「山形県地域史研究第19号」(平成6年2月発行)にしている。

「最上・白鳥両家の婚姻関係について」と云う題で、両家の間には二回の婚姻関係があったのではないかと提唱している。

最初は長久と義光の姉で、あとで義康と長久の娘の婚姻と、二回の婚姻関係を一回と考えたことで、混乱が生じたのではないかと云っている。その根拠は中里氏の国史を上げている。くわしくは山形県地域史研究第19号を参照してください。

谷地入部について

戦国時代、中条家に戦わずすんなり入ったのはどうしてか？当時の白鳥氏と中条氏の争いの記録がどこにもない。これもなぞである。つぎのなぞは最上家が元和8年(1622)に相続をめぐる争いから、57万石没収されて、義俊は近江国(静岡県)に改易され、江州(滋賀県)と三河国(静岡県)に各5千石、合計1万石を与えられた。

最上家が近江国に移ったあと滋賀県八日市市尻無町妙応寺を菩提寺とした。その寺の最上家の過去帳には同家出身者の戒名の外に、次の戒名が記されている。

奉運院殿覚性圓明大居士 城取重郎

実相院殿圓成了頓大居士 白鳥重郎

城取と白鳥は同じ事だと云われている。

この事について今田信一先生は「義俊は家親の子であるから、白鳥家の霊位を並べる筈はない」と云う。とするとこれは義康の妻、即ち長久の娘であると考えるのが、妥当かと思われる。

不許複製(複製を禁じます)
白鳥十郎奉賛会のホームページ

長久の娘は父長久の没後も最上家にあつて転封の際に二つの位牌をひそかに持参したものと推定したいと槇先生も云っている。

そうなると、日吉姫については幸生と沼の平に明確な伝承がある。これだけ確かな言い伝えがあるとすれば、十郎長久の娘が最上家に残り、近江国へ入ったとは考えられない。

それでは、妙応寺の過去帳はどう解釈すればよいのだろうか？